

対照言語行動学研究会（JACSLA）第 20 回記念大会 講演概要

2022. 10. 8 開催 於 神奈川大学 みなとみらいキャンパス

タイトル	格助詞「が」の変容—連体から連用へ—
著者名（所属）	山田昌裕（神奈川大学）
連絡先 E メール	ft102063xu@kanagawa-u. ac. jp
<p>講演内容</p> <p>古代日本語における無助詞名詞句の統語的振舞いを観察すると（山田（2021））、情報伝達上、ガ格名詞句を「が」によって表示する必要性はなかったと考えられる。そして平安期の主節における「が」は「ぞ」との棲み分けがあったことが伺え、また名詞文において「が」が「ぞ」「こそ」の領域へと拡大したことを考えると（山田（2010））、主節における格助詞「が」はもともと、統語的役割を表示するためではなく、強調（または焦点）を表示するために用いられていたと考えられる。15 世紀以降、新たな領域（「からが」、「ばかりが」、テ節+が、複合助辞+が）へと拡大した「が」もいわゆる強調を表示するために用いられていると考えられた。</p> <p>「が」は、当初主語名詞句に下接していたため、連体表示から統語的役割を表示する主語表示へと中心的機能を移行させたと考えられてきたが、単に主語を表示するというだけではなく、主語を強調表示していたと捉えなおすことができる。そしてこの強調表示という機能をさらに強く発動（主語表示が背景化）した「が」が、18 世紀以降、主語名詞句以外の成分にも下接するようになった「が」であると考えられる。</p> <p>以上のような「が」の用法の移り変わりを踏まえて、格助詞「が」の変容を巨視的に俯瞰すると、連体表示から主語表示へではなく、連体用法から連用用法へと変化してきたと考えることができる。</p> <p>「が」には、いわゆる強調（総記、解答提示、焦点など）以外にいわゆる中立叙述（眼前描写、現象文など）が認められる。主節における強調の「が」は平安期において会話文心中文で見られたわけであるが、現代日本語においても音声言語における「が」は強調として使われているのではないだろうか。証左として、方言の実態があげられる。方言調査（音声言語）では、中立叙述の場合、無助詞や「の」が一般的で「が」も許容されるが、強調の場合には「が」が必須である。一方、中立叙述の「が」は書記言語において発達し、現代日本語の音声言語においてはあまり使われていないのではないだろうか。金水（2011）の言を借りれば、強調の「が」は子供の言語や地域の言語（音声＞書記）、中立叙述の「が」は広域言語（書記＞音声）という棲み分けがあるのではないだろうか。</p> <p>参考文献</p> <p>金水 敏(2011)「日本語史とは何か——言語を階層的な資源と見る立場から——」『早稲田日本語研究』20</p> <p>山田昌裕(2010)『格助詞「ガ」の通時的研究』(ひつじ書房)</p> <p>山田昌裕(2021)「無助詞名詞句の格と運用法—平安期鎌倉期の実態より—」『日本語文法』21-1、pp. 4~20</p>	